

No.23 トニー・バーラント —無題—

Tony Berlant

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成10) 年12月1日付 立川市市報記事より

トニー・バーラントは、ビルの谷間のほの暗い場所のドライエリアの壁を、金属の断片を張り合わせた色鮮やかな壁面に変えた。壁はいびつな形をして給油口まで付いており、普通このような場所はアーティストには喜ばれない。しかし彼は非常に喜び、ここを洞くつの中の聖なる泉ととらえ、自らの内的世界を描き出した。

彼はアメリカ人だが、アメリカ先住民の刺繍の収集家・研究者でもある。そして、期せずして、彼の作品の向かい側の植栽には、すでにこの欄でも紹介した、アメリカ先住民チェロキー出身の、ジミー・ダーハムの作品がある。かれもまたあえてここを選んだ。失われていく民族に共感を持つバーラントと民族の記憶を残そうとしたダーハムが、同じ場所を選んだというのは不思議なことで、二人によってこのデッドスペースは実に緊迫感のある空間となった。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

ファーレ立川プロジェクトに参加させていただき、名誉に思っております。

私が製作を依頼された場所は、素晴らしい隠れた特性を備えております。私は、建物の裏にある大きな換気口を囲む小さな壁面を作ろうとしています。

全体は、空から、頭上を通るペDESTリアンデッキによって覆われています。その場所の一方は、通りに対して開かれています。私にとって、この場所は魔法の聖堂のように感じられます。ウルトラ・マリブルのタイルで覆われる換気口は、聖なる泉や洞穴を私に思い起こさせます。それらは、人生の精神的、魔術的側面に出会う場として、いずこの地でも常に人間に向かって語りかけてきました。

都市の商業活動とエネルギーは、この静かな場所の周囲でにぎやかにざわめくことでしょう。私は、一時でいい、ここを通り過ぎる人が私の内的な主観世界を垣間見る場所を作れたら、と思っています。

私は常に、最も個人的で内面的な芸術こそが、やがては、最も普遍的で時を超越したものとなると信じてきました。私が作ろうとしている心象風景は、日本という全く異質な文化において、外国人の目にのみ存在する日本の姿を創り出す文化的フィルターを通して、一人のアメリカ人である私が経験し、抱いた、奇妙で不思議な感覚を映し出すことでしょう。それは、私の国を訪れる日本人が、自分たちの眼差にのみ存在するアメリカの姿を見ているのと同じです。

私はただ、どのアーティストも自画像を作っているだけで、人はそれぞれ自分だけの現実を抱いている、と言っているのでしょうか。逆説的ですが、芸術作品というのは、あらゆる時間と、文化を超えて直接交感できる沈黙の言語によって語っているのです。

少年の頃、私は父と一緒に、パーム・スプリングスのカー・レースのピットで、ジェームス・ディーンを見たのを覚えています。私の目は、彼が運転するポルシェ・スパイターに釘付けでした。それは、そのクラスで最も速いマシンでカリフォルニアでは珍しいものでした。また私は、人々が、彼が有名な若い俳優であると話していたのを覚えています。彼は、死後、アメリカで極めてロマンチックな人物として描かれるようになりました。

日本を訪れて、ジェームス・ディーンが、マリリンやエルビスとともに神話の殿堂におかれていることを私は知りました、日本で私が発見したジェームス・ディーンの神話は、日本独特のもので、私がパーム・スプリングスのレース場で見つめた若い男の思い出とはかけ離れたものです。私は、ファーレ立川プロジェクトにおける作品を、ジェームス・ディーンに捧げようと思いません。

それは意味のあることでしょうか？